

Title	室鳩巢の辺塞詩 : 盛唐詩の模倣と忠臣像の造形
Author(s)	山本, 嘉孝
Citation	語文. 2017, 108, p. 37-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71007
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

室鳩巢の辺塞詩

——盛唐詩の模倣と忠臣像の造形——

はじめに

辺塞詩とは、中国北部・西部の国境地帯に題材を取り、対異民族戦争に駆り出された兵士の悲哀や勇壮を詠んだ詩で、六朝、唐の時代に多く作られた。¹⁾ 日本でも、早くは『懷風藻』に載る藤原宇合「奉西海道節度使之作」が辺境地帯の戦闘を題材としたが、²⁾ 辺塞詩の受容・制作が本格化したのは、盛唐詩が作詩の規範とされた近世中期（十八世紀）であり、今日では荻生徂徠の一門による辺塞詩がよく知られている。

日野龍夫氏は、徂徠門の服部南郭の詩に「朱子学的な拘束によって抑圧されていた、あるローマン的な思い」が込められているとし、南郭の辺塞詩「塞下曲」について、「これが江戸時代の中期の日本の現実にはないものであるということは、もちろん南郭自身だつてよく知っています」と、当世日本の実景を描写した詩ではないことを指摘された。³⁾ 同氏は、南郭は辺塞詩を作ること

山 本 嘉 孝

で、「卓小な現実の自己を放棄し、自己を古人として虚構することができた」、また「現実の遮断という願望が完全に果され、古人となった」と、辺塞詩の虚構性を強調された。⁴⁾ 確かに、太平の世で作られた辺塞詩の内部に広がる戦闘の情景は虚構であった。しかし、近世日本で作られた辺塞詩が、常に「現実」を「遮断」するものであったかについては更なる検討が必要である。日野氏も、近世日本で作られた全ての辺塞詩ではなく、南郭の詩作に特定して論じられた。

そもそも近世日本で辺塞詩を作り始めたのは、徂徠門ではなく木下順庵門下、いわゆる木門の面々であった。杉下元明氏が「元禄末から宝永、護園派が進むべき道を見出しなかつた時期に、木門の詩人たちが早くも格調派的な詩を作っていた」と指摘された通り、盛唐詩の模倣も木門から始まった。⁵⁾

本稿では、木門の室鳩巢（万治元年（一六五八）〜享保十九年（一七三四））の辺塞詩を取り上げ、近世中期日本における辺塞詩

の具体的な制作方法と、辺塞詩が作られた意味について検討する。木門屈指の詩人としては新井白石や祇園南海が想起されようが、木門の中でも最も厚く朱子学を奉じ、徂徠に対して批判的態度を示した鳩巢は、木門と徂徠門の学術・文芸の共通点と相違点を明らかにする上で見過ごせない存在だと言える。

一、木門における辺塞詩の制作——題詠と盛唐詩の模倣

元禄二年（一六八九）、木下順庵に入門していた十四歳の祇園南海は、「辺馬有帰思」（辺馬帰思有り）と題した辺塞詩を同門の先輩の前で作ってみせた。詩形は、対句の構成力が試される七言律詩である。その詩を収める『南海先生集』（寛政七年（一七九五）刊）卷三には、詩題注に「余時年十四、源白石、南南山、松霞沼、原箕洲、与会雨伯陽寓居同賦」（余時に年十四、源白石、南南山、松霞沼、原箕洲、与に雨伯陽の寓居に会して同じく賦す）とあり、新井白石、南部南山、松浦霞沼、榊原箕洲、雨森芳洲が集う場で共に作詩したことが分かる。詩注に引用される白石の「其詩雄渾悲壯、足以下後來可任斯文也」（其の詩雄渾悲壯にして、以て後來斯文を任すべきを卜するに足るなり）との評では、完成度の高い辺塞詩を作った南海が、学問の道において将来有望と見做されている。

言うまでもなく、十四歳の南海は実体験に基づき辺塞詩を詠んだのではない。詩題の「辺馬有帰思」は、王讚「雜詩」（『文選』〔寛永二年（一六二五）刊〕卷二十九）の「朔風動秋草、辺馬有

帰心」（朔風秋草を動かし、辺馬帰る心有り）と、北風が吹くと胡馬が北方の故郷を恋しがる、という情景に基づく。南海の詩は第三句「胡塵四起風悲塞」（胡塵まほ四に起りて風は塞に悲しましむ）に風、第八句「何日華山休戰還」（何れの日か華山戦を休めて還らん）に望郷の念を詠み、第五句で「却恨曾逢伯樂顧」（却つて恨む曾て伯樂の顧に逢はんことを）と、名馬を見分ける達人であつた伯樂の故事を引き、主君に才能を認められて戦地に送り込まれた兵士の辛苦を使役される馬になぞらえて表現している。南海は、詩題に沿つた作詩、すなわち題詠を行ったのである。

近世日本では題詠詩として辺塞詩が作られ、木門も例外ではなかつた。白石の辺塞詩「鶴樓会賦辺城秋」（『白石先生余稿』〔享保二十年（一七三五）刊〕卷二、五言古詩）は、益田鶴樓の催した宴会で「辺城の秋」の題に沿つて作られたことが窺える。「辺塞」の分類は、木門で参照された『円機活法』卷五、「瀛奎律髓」卷下、『杜少陵先生詩分類集註』卷三などの詩学書・詩集に見られる。⁶⁾「辺塞」は題詠詩の主要なテーマの一つであつた。

また木門の辺塞詩は、概ね盛唐詩の模倣である。白石が享保年間（一七二〇～一七三六）に仙台の佐久間洞巖に宛てた書簡に基づく作詩指南書『白石先生詩範』（天明二年（一七八二）跋刊、『日本詩話叢書』第一卷参照）には、「詩ハ近来ハ唐詩ヲカラモ朝鮮モコナタモ同ジク学ビ候。唐ニテ初唐盛唐ノ詩ヲ諸体共ニヒタト見候テ、ソラニ工候テ」と、近頃の唐土・朝鮮・日本で唐詩が作詩の規範とされていることが述べられる。初唐・盛唐の詩を暗記すれば、「似申スヤ

ウニ覚エ、句調ヨクウツリ候テ」、また「平生ニ胸中ニ唐詩ミチミチ候テ有之候得バ、ソノ性情ノ流レ出候時ニ、カノ胸中ノ唐詩ノ中ヲ通り候テ出候間、イソツトモナク唐詩ノ風味有之モノニ候」というように、自ずと唐詩に似た詩が作れる。これは嚴羽『滄浪詩話』（『詩人玉屑』巻一、以下同様）の「取盛唐諸名家詩醞藉胸中。久之自然悟入」（盛唐諸名家の詩を取つて胸中に醞藉せよ。之を久しうして自然に悟入せん）との記述を踏まえた作詩法であろう。白石は「李杜ノ詩ノ、六朝ノ衆ノ詩ニイキウツシナル句調、詩体、イカホドモイカホドモ有之事ニ候」と記し、かの李白や杜甫の詩にも、六朝詩を模倣した作品が多いことを指摘した。

唐詩を学ぶ上で基本となる詩集として白石が挙げるのは『唐詩訓解』である。「我等ハワカキ衆ヘ唐詩訓解、文章規範寛エラレ候ヘト申ヨリ外他語ハ無之事ニ候。是ヲ過候上ハ、其人々ノ自得ニ有ベク候」と、『唐詩訓解』を暗記することから始め、その後各自で学習を進めるべきだとある。『唐詩訓解』は、有木大輔氏が考究されたように、明末の万曆四十六年（一六一八）に刊行された。『寛文無刊記書籍目録』と『元禄九年書籍目録大全』に書名が載り、遅くとも寛文年間（一六六〇年代）には和刻本が流通していた。書肆は、禅書・漢籍の出版で知られた京都の老舖田原仁左衛門・勘兵衛両家（屋号は文林軒）で、版には仁左衛門本と勘兵衛本の二種がある。所収の詩は辺塞詩を含む盛唐詩が中心で、その大部分が、享保（一七二〇年代）以降、『唐詩訓解』を

排除しながら世に大流行することとなる『唐詩選』と共通する。両書の和刻本の最大の違いは、『唐詩訓解』が原刊本の注を全て載せるのに対し、『唐詩選』では全ての注が省略された点である。

南海の詩を白石は「雄渾悲壯」と評した。これは嚴羽『滄浪詩話』に「詩之品有九。曰高、曰古、曰深、曰遠、曰長、曰雄渾、曰飄逸、曰悲壯、曰凄婉」（詩の品九つ有り。曰く高、曰く古、曰く深、曰く遠、曰く長、曰く雄渾、曰く飄逸、曰く悲壯、曰く凄婉）とある記述を踏まえる。この箇所を含む『滄浪詩話』の記述は『唐詩訓解』（仁左衛門本）首巻の「読唐詩評」に抄出されており、同選集が盛唐の格調詩を貴ぶ価値基準のもとに編まれたであることは明らかである。編者が李攀龍、校正者が袁宏道との怪しい素性の詩集とはいえ、近世日本における盛唐詩の模倣は、まず木門で、『唐詩訓解』を規範として開始された。白石が鳩巢に宛てた書簡でも、『唐詩訓解』と詩論書『詩人玉屑』を参照する箇所があり、兩人が両書を参照していたことが分かる。

二、室鳩巢の辺塞詩——『唐詩訓解』の利用

詩題と内容から厳密に判断すると、鳩巢の辺塞詩としては、宝永三年（一七〇六年）、四十九歳の時の作と思しい「従軍行」と「塞下曲」、及びその十年後の享保元年（一七一六年）作と思しい「塞外客意」の合計三首が伝わる。制作年は『鳩巢先生文集』の配列から推定した。辺塞詩特有の語を部分的に用いる詩は他にもあるが、純粹に辺境の戦場を詠んだ詩は、上記三首に限定される。

白石が「入塞曲」（『白石詩草』）、「辺城秋」、「辺城曲」（『白石先生余稿』巻一）、「辺城秋」、「送従軍人徼人」、「辺城曲」、「従軍遊獵」、「鶴樓会賦辺城秋」（同上巻二）、南海が「辺馬有帰思」、「隴頭水」（『南海先生集』）、「隴頭水」、「胡笳曲」、「従軍行」、「揮戈万里征」、「晨征聽曉鴻」（『一夜百首』）、「従戎曲」、「入塞曲」、「辺城將」（『一夜百首』後題百詠）、徂徠が「辺馬有帰心」、「出塞」、「出城門」、「従軍行」、「辺城落日」、「涼州曲」、「塞上曲分得南字」（『徂徠集』）といった辺塞詩を制作したのに比べれば、鳩巢の辺塞詩は少ない。「中秋」を題に含む鳩巢の詩が四十首以上伝わることを鑑みれば、鳩巢は辺塞詩を闇雲には作らなかつたと言えよう。

鳩巢の「従軍行」と「塞下曲」は、写本一冊と刊本二点に収録されて伝わっている。写本は既に杉下元明氏（前掲論考）が紹介された『秋興八首雜題拾五首』（書写年不詳、東京都立中央図書館加賀文庫蔵、書名は元表紙の外題に拠る）で、白石の批評とともに、「秋興八首」（七言律詩）と「古題拾五首」（五言律詩）の合計二十三首の鳩巢の詩を収める。辺塞詩二首は「古題拾五首」の冒頭二首である。元表紙に「宝永丙戌六月下澣」（丙戌は宝永三年（一七〇六）との墨書がある。『鳩巢先生文集』の配列に拠って推定すると、「古題拾五首」の制作年は宝永三年であるが、「秋興八首」の制作時期は元禄十五年（一七〇二）の中秋から冬にかけてである。

「古題拾五首」の残りの十三首（「関山月」、「折楊柳」、「梅花

落」、「西宮愁怨」、「秋閨怨」、「古別離」、「行路難」、「觀獵」、「白鷺」、「胡馬」、「宝剑」、「擣衣」、「聞笛」）は、辺塞詩と関連の深い宮閨詩、あるいは辺塞の情景や事物などを部分的に取り込んだ詩である。連作全てが題詠詩で、辺境に従軍する夫と、その帰還を待つ妻の心情を詠むという、まさしく盛唐詩らしい趣向で貫かれている。「古題拾五首」の内、まず「行路難」、「觀獵」、「塞下曲」の三首が新井白石編『停雲集』（享保三年（一七一八）刊）に収録され、次いで全十五首が『鳩巢先生文集』前編（宝暦十一年（一七六一）刊）巻五に収録された。配列と一部の字句に異同があるが、「従軍行」と「塞下曲」の字句に異同は無い。『秋興八首雜題拾五首』の配列順に、二首続けて掲出する。

従軍行

万幕平沙上	万幕	平沙の上
轅門落日曛	轅門	落日曛る
龍城胡騎出	龍城	胡騎出でて
魚海漢軍分	魚海	漢軍分かる
鳴鼓連遼水	鳴鼓	遼水に連なり
高旗卷隴雲	高旗	隴雲を巻く
何時清朔漠	何時	の時か朔漠を清めて
婦去報明君	婦り去つて	明君に報いん

（五言律詩、仄起式、上平声十二文韻〔曛・分・雲・君〕）

塞下曲

八月秋霜下

鉄衣更覺寒

馬鳴沙草短

人渴井泉乾

烽火燒雲尽

笛声吐月残

欲知酬国日

須我斬楼蘭

(五言律詩、仄起式、上平声十四寒韻(寒・乾・残・蘭))

八月秋霜下つて

鉄衣更に寒きを覚ゆ

馬鳴いて沙草短く

人渴いて井泉乾く

烽火 雲を焼いて尽き

笛声 月を吐いて残る

国に酬ゆる日を知らんと欲せば

我が楼蘭を斬るを須て

二首の大意を示すと、「従軍行」は、広大な砂漠の傍らに、おびただしい数のテントが立ち並び、軍営の門に夕日が落ちていく。龍城から匈奴の騎兵隊が出て、魚海(蒙古の地)に漢軍の姿がくつきりと浮かび上がる。太鼓の鳴る音は遼水のどこまでも響き渡り、高く揚がる旗は隴山の雲を巻いて翻る。いつになれば、北方の砂漠を一掃し、帰還して英明な主君に報いることができるだろうか、というもの。次の「塞下曲」は、八月に秋の霜が下り、鎧を着けているといよいよ寒さを感じる。馬は鳴くが、砂地に生えた草は短く、人は渴いているが、井戸は乾涸びている。のろしは雲を焼いて尽き、笛の音に月があらわれ余韻が残る。国に報いる日が知りたければ、俺が楼蘭の王の首を取るのを待つておれ、という。苛酷な辺境の地で苦戦しても、主君と祖国のために命懸

けで戦う兵士の心情が表現される。「漢軍」と西域の異民族国家「楼蘭」への言及があり、二首とも漢代の匈奴征伐を意識する。

二首に用いられる字句の多くが「唐詩訓解」所収の詩と共通しており、鳩果が同書の暗記と模倣によって作詩したことが窺える。以下、該当句を抄出する(傍線筆者、以下同様)。「従軍行」と字句が共通するのは、杜甫「後出塞」(卷二)の「平沙列万幕」(平沙万幕を列ね)、岑参「封大夫破播仙凯歌」其二(卷七)の「日落轆門鼓角鳴、千群面縛出蕃城。洗兵魚海雲迎陣、秣馬龍堆月照營」(日落ちて轆門鼓角鳴り、千群面縛して蕃城を出づ。兵を洗ふ魚海雲陣を迎へ、馬を秣ふ龍堆月營を照らす)、楊炯「従軍行」(卷三)の「鉄騎遼龍城」(鉄騎龍城を遼る)、杜甫「吹笛」(卷五)の「胡騎中宵堪北走」(胡騎中宵北走するに堪ふ)、李白「侍從遊宿温泉宮」(卷三・李白「塞下曲」注)の「霓旌卷夜雲」(霓旌夜雲を巻く)、李白「子夜呉歌」(卷二)の「何日平胡虜」(何れの日か胡虜を平らげて)、駱賓王「宿温城望軍營」(卷四)の「沙明楚練分」・「還応雪漠恥、持此報明君」(沙明らかにして楚練分かる・還つて応に漠の恥を雪ぎ、此れを持して明君に報ずべし)などである。

「塞下曲」と字句が共通するのは、高適「燕歌行」(卷二)の「鉄衣遠戍辛勤久」(鉄衣遠く戍りて辛勤久し)、杜甫「後出塞」(卷二)の「馬鳴風蕭蕭」(馬鳴いて風蕭蕭たり)、高適「使青夷軍入居庸」(卷三)の「溪冷泉声苦、山空木葉乾」(溪冷にして泉声苦しみ、山空にして木葉乾く)、楊炯「従軍行」(卷三)の「烽

「火照西京」（烽火西京を照らし）、「寂峻然」「塞下曲」（卷七）の「胡人吹入笛声来」（胡人吹いて笛声に入れ来たる）、張仲素「塞下曲」其二（卷七）の「直斬樓蘭報国恩」（直ちに楼蘭を斬つて国恩に報ぜん）である。

『秋興八首雜題拾五首』で、白石が鳩巢の辺塞詩二首に与えた批評を確認すると、字句の用法、辺塞詩らしさの追求などに関心が向けられており、盛唐詩の再現に苦心し、熱中した様が窺える。

「従軍行」については、第一・二・三・四・六句の各字に圈点が付され高く評価される。但し第六句については、「高」・「旗」・「隴」・「雲」の字は互いに「縁」があり上手に用いられているが、「連」字捲ノ字響の様不被存候間、御改も御子細も可有之哉と存候」と、「卷」の字が第五句の「連」と満足な対を成さないことが指摘され、改変が勧められる。詩全体について白石は「従老杜得来」（老杜より得来たる）と記し、杜甫に学んだ詩であることとを指摘する。また「塞下曲」については、第三・四句に圈点が付し、特に直すべきところは無いとしながらも、全篇が「苦戦」一色であることを指摘し、「如此之作ハ悲壯雄壯の間に得候様ニ仕度事にて候」と、「悲壯」と「雄壯」の中間を目指すよう助言している。

また享保元年（一七一六年）作と思われる鳩巢の三首目の辺塞詩「塞外客意」（『鳩巢先生文集』後編「宝曆十三年（一七六三）刊」卷四）は、押韻に同じ韻が用いられたこともあり、語句や趣向の上で「塞下曲」と共通点が多い。これも題詠詩で、文集で直

前に配置される閨怨詩「江南別意」と一緒に作られた可能性がある。

塞外客意

八月秋風河水寒

孤城寄在白雲端

草衰塞上胡笳動

雁度樓頭漢月殘

烽火纔飛千騎合

鄉書一到万人看

年年征戍空皮骨

懶向故国説旧歡

（七言律詩、仄起式、上平声十四寒韻〔寒・端・殘・看・歡〕）

八月秋風河水寒し

孤城寄つて白雲の端に在り

草衰へて 塞上 胡笳動き

雁度つて 樓頭 漢月残る

烽火纔かに飛んで 千騎合し

郷書一たび到つて 万人看る

年年征戍しく皮骨

故国に向かひて旧歡を説くことを懶る

久しく祖国と連絡を取っていないことを言う第八句には、単なる望郷の念というよりは、未だ報告できるような勝利を収めていない後ろめたさが込められており、先の二首と似て、何としてでも自身の主君や国に報いようとする気概が表現されている。「漢月」とあるため、この詩も漢代の辺塞を意識する。使用されている語句も、多くが『唐詩訓解』所収の辺塞詩と共通する。首聯を例に見ると、嚴武「軍城早秋」（卷七）の「昨夜秋風入漢関」（昨夜秋風漢関に入る）、王昌齡「出塞行」（卷七）の「黄河水流無尽時」（黄河水流れて尽くる時無し）、王之涣「涼州詞」（卷七）「黄

河遠上白雲間、一片孤城万仞山（黄河遠く上る白雲の間、一片の孤城万仞の山）などが挙げられる。

三、盛唐詩と時事——「詩史」と呼ばれた杜甫

先に見た通り、白石は鳩巢の「従軍行」を批評して、殊更に「老杜」すなわち杜甫からの影響を指摘した。ところが、杜甫からの明らかな字句の借用があるのは第一句のみである。白石の指摘は、字句の問題にとどまらない可能性がある。白石や鳩巢が杜甫の辺塞詩をどのように捉えていたかを探るべく、『唐詩訓解』の注を見てみよう。

杜甫「後出塞」の詩題注には、「乾元時在秦州思天宝間事作」（乾元の時秦州に在りて天宝間の事を思ひて作る）とあり、杜甫が乾元年間（七五八—七六〇）に、数年前の安祿山の乱（天宝十四年（七五五）を思い起こして作詩したとする説が採られている。詩の最終句で「恐是霍嫖姚」（恐らくは是れ霍嫖姚ならん）と、軍を統率する「大将」が漢代の武將、霍去病に見立てられることについて、詩注には「得非漢之嫖姚耶。則亦内寵鄙臣耳。此蓋為祿山發也」（漢の嫖姚に非ざることを得んや。則ち亦た内寵の鄙臣のみ。此れ蓋し祿山が為に発するなり）と、玄宗に寵愛されたばかりに力をつけ反乱を起こした安祿山からの連想で、同じく寵愛を受けて勢力を伸ばした漢代の霍去病が詩に詠み込まれた、と説明される。

『唐詩訓解』に載る杜甫「後出塞」は、同題の連作五首の第二

首である。「杜少陵先生詩分類集註」（明曆二年（一六五六）跋刊）卷三・五言古詩・辺塞類で確認すると、やはり連作全体が安祿山の乱を意識して作られたと冒頭の注にある。また特に杜甫の制作態度に言及するのは、第三首の「古人重守辺、今人重高勳」（古人は守辺を重んじ、今人は高勳を重んず）という対句に付された注である。「蓋譏今人以開辺為重者也」（蓋し今人辺を開くを以て重しと為す者を譏るなり）と、真摯に辺境を準備しようとして、勳功を目当てとする当世の利己的な武將を杜甫が批判する詩として解釈される。

再び『唐詩訓解』に戻る。鳩巢の宝永三年（一七〇六）の作と思われる辺塞詩の詩題「従軍行」と「塞下曲」は両方とも樂府題、すなわち漢代の歌謡の題を借りた詩だが、李白「烏栖曲」（巻二）の詩注には、李白と杜甫が樂府題詩を制作した背景について、「按李杜樂府皆有所托意而發。非若今人無病而強呻吟者。但子美真賦時事、太白則援古以諷今。今讀者鮮識其旨」（按ずるに李杜が樂府、皆意を托する所有りて発す。今人病無くして強ひて呻吟する者の若きに非ず。但だ子美は真に時事を賦し、太白は則ち古を援いて以て今を諷す。今讀者其の旨を識ること鮮し）とある。杜甫は「時事」すなわち当世の出来事を樂府題に託して詠んだ、との見解が示されており、それは「今人」が実感もなく詩を作るのとは違うという。

以上をまとめると、『唐詩訓解』及び『杜少陵先生詩分類集註』では、杜甫の辺塞詩が、古代、多くは漢代の辺塞での戦闘に託し

て「時事」を詠んだ、との見方が貫かれている。これは、杜甫を「詩史」と見做す宋代の詩論に基づく視点であろう。⁽⁹⁾『詩人玉屑』巻十四の「宋子京賛」条には、「甫又善陳時事、律切精深。至千言不少衰。世号詩史」(甫又た善く時事を陳べて、律切にして精深なり。千言に至れども少しも衰へず。世に詩史と号す)と、「時事」を詩に詠み込む杜甫を「詩史」と呼び高く評価する宋祁の記述が載る。同巻の「詩史」条には、「凡出処去就、動息勞佚、悲歡憂樂、忠憤感激、好賢惡惡、一見於詩。讀之可以知其世。學士大夫謂之詩史」(凡そ出処去就、動息勞佚、悲歡憂樂、忠憤感激、賢を好して悪を惡むこと、一に詩に見はる。之を讀んで以て其の世を知るべし。學士大夫之を詩史と謂ふ)とある孫僅の記述が載る。杜甫の詩を読めば、當時のあらゆることがよく分かるので、宋代の學者・官僚は杜甫を「詩史」を呼んだ。なお宋祁と僅孫はともに北宋の人である。

鳩巢の師、順庵も、杜甫を「詩史」として捉えていた。七言律詩「誦杜律」(『錦里文集』[天明七年(一七八七)刊]卷三)の頸聯には「陳時寧与史編異、爬痒渾如仙爪伴」(時を陳べて寧ろ史編と異なり、痒を爬いて渾て仙爪と伴し)とある。杜甫が時事を詠むと、史書とはまた異なり、非常に妙を得ており、当時の世のことがとてよく分かることをいう。「陳時」の二字は、先の宋祁の引用と考えられ、「爬痒」は、嚴羽『滄浪詩話』に「意貴透。不可隔靴搔癢」(意は透ることを貴ぶ。靴を隔て、癢を搔くべからず)とある箇所を踏まえる。詩に込められた思いや考えが

明瞭で、もどかしさが無いことをいう。

鳩巢も、杜甫の詩からは、盛唐当時の世の中の様子がよく伝わってくる、と観察している。鳩巢の晩年の和文隨筆『駿台雜話』(寛延元年(一七四八)刊)巻五の「倭歌に感興の益あり」には「翁わかき時より盛唐の詩を好て讀て」とあり、盛唐詩人の賈至、王維、岑參、杜甫の詩が、「文彩の煇赫たるのみにあらず、開元泰平の氣象目にあるがごとし」と高く評価される。詩の言葉が盛大で美しいだけでなく、当時の「泰平」の様子がありありと感じられるのである。ここで例示される四首は、賈至の「早朝大明宮呈兩省僚友」、王維と岑參の「和賈至舍人早朝大明宮」(以上三首は『唐詩訓解』卷五所収)、杜甫の「奉和賈至舍人早朝大明宮」であり、どれもきらびやかな表現で長安の宮殿の情景を詠む七言律詩である。实景をありのまま描写するのではなく、例えば岑參の頷聯に「金闕曉鐘開萬戶、玉階仙仗擁千官」(金闕の曉鐘萬戸を開き、玉階の仙仗千官を擁す)とあるように、多分な誇張が伴い、幻想的情緒の溢れる詩である。しかし、そこに込められた実感は現実のものであり、後世の者が読めばその時代の様子が手に取るように分かるのである。

杜甫を「詩史」と見做すならば、先に見た杜甫の辺塞詩「後出塞」其二では、字句の上では、漢代の辺塞で霍去病が肅々と軍隊を率いる情景が描かれているが、そこからは、安祿山の乱に揺れる、杜甫にとつての当世の様子が、非常によく伝わってくる、とのことになる。辺塞詩と「泰平」を寿ぐ宮殿の詩は全く対照的だ

が、詩人が生きる時代の空気を詩に詠み込む点では同じである。

四、忠臣像の造形——詠史詩、及び『赤穂義人録』との関連

さて宝永三年（一七〇六）の作と思われる鳩巢の辺塞詩「従軍行」と「塞下曲」は、先も触れたように、二首とも楽府題詩である。「従軍行」は『文選』（巻二十八楽府下）所収の陸機「楽府十首」第二首の題である。「塞下曲」については、『唐詩訓解』（卷三）所収の李白「塞下曲」の詩題注に、「楽府題。征戍十五曲之一」（楽府の題。征戍十五曲の一なり）とある。辺塞詩の詩題は必ずしも楽府題であるとは限らず、鳩巢の「塞外客意」も楽府題詩ではない。先述したように、『唐詩訓解』の注には、杜甫は楽府題詩に託して「時事」を詠んだ、との記述が見える。鳩巢が「従軍行」と「塞下曲」の題で作詩するに当たり、「時事」の吟詠を意識したとしても不思議ではない。

宝永三年（一七〇六）の鳩巢から見ても、最大の「時事」と言えば、赤穂事件であったであろう。吉良邸討ち入りは、およそ四年前の元禄十五年（一七〇二）十二月のことであった。鳩巢はその翌年元禄十六年（一七〇三）冬、赤穂事件の経緯と赤穂浪士の伝記を漢文で記した史書『赤穂義人録』の初稿を完成させた。加筆・修正を行い、宝永六年（一七〇九）に改訂版を脱稿するまで六年の歳月が流れたが、鳩巢はその間も、勝又基氏が考証されたように、宝永四年（一七〇七）、藤井懶斎に『赤穂義人録』写本を進呈するなど、『赤穂義人録』から速く離れることはなかった。

「従軍行」と「塞下曲」は、ちょうどこの時期に作られたのである。

鳩巢は『赤穂義人録』の中で、赤穂浪士を主君に忠義を尽くした家臣として称揚する。「従軍行」と「塞下曲」でも、「明君に報いん」や「国に酬ゆる日」といった表現によって、詩の中の兵士が忠義を尽くす臣下として造形されており、この二首と『義人録』の間には共通の忠臣像が共有されている。「塞下曲」中の兵士は、楼蘭の王の仇を取った漢の傅介子になぞらえられるが、同時に、二首の辺塞詩は、漢代の忠臣、蘇武を詠んだ詠史詩とも連なる。『鳩巢先生文集』前編・卷二の配列に拠れば、順庵に入門して間もない寛文十二年（一六七二）から延宝二年（一六七四）までの間、すなわち十五歳から十七歳までの間に、鳩巢は蘇武の忠節を詠んだ次の詠史詩を題詠している。

蘇武抵雪

胡地蕭条寒氣侵	胡地蕭条として寒氣侵す
孤臣南望幾哀吟	孤臣南望して幾たびか哀吟す
窖中餐雪苦辛切	窖中雪を餐らふ 苦辛切なり
海上牧羊婦思深	海上羊を牧ふ 婦思深し
壯節肯辭為客怨	壯節 肯へて辭せんや 客と為るの怨み
清忠自抱報国心	清忠 自ら抱く 国に報ゆるの心
何期寥落多年後	何ぞ期せん 寥落 多年の後
鴻雁伝書飛上林	鴻雁書を伝へて上林に飛ぶを

(七言律詩、仄起式、下平声十二侵韻(侵・吟・深・心・林))

『漢書』蘇武伝(『唐詩訓解』卷七、張仲素「塞下曲」其二詩注に抜粋)に拠れば、蘇武は匈奴の地で單于に捕らえられ、北海(現バイカル湖)のほとりで、オスの羊が乳を出すまで解放しないと脅されたが、雪を食らいながらも、漢への忠義を守り、およそ二十年間降参せず、雁に託した手紙が届いて遂に生還の機会を得た。蘇武は日本でも早くから知られており、『平家物語』巻二では配流された平康頼が蘇武になぞらえられている。第六句に「国に報ゆるの心」という表現が使われているが、鳩巢は生涯を通じて、詩に「報国」(国に報ゆ)の語を幾度となく用いている。詩の種類は送別詩(『送青地伯強兄赴武州』、『鳩巢先生文集』前編卷四)、杜甫の和韻詩(『秋興八首和杜甫韻』其五、同上前編卷四)、新年の詩(『癸丑元旦二首』其一、同上後編卷三)、朝鮮通信使との応酬詩(『敬簡呈鏡湖』、同上後編卷三)など多岐に亘るが、鳩巢が「報国」を用いた最も早い例がこの蘇武の詩なのである。

順庵にも連作「十雪詩」の内に、「蘇武抵雪」と題された七言絶句がある(『錦里文集』(天明七年(一七八七)刊)卷五)。第四句に「漢臣心」(漢臣の心)とあり、蘇武が優良な臣下として描かれる。同時に、順庵の唯一の辺塞詩「辺城秋気早」(同上巻七、七言律詩)では「雁」と「單于」が詠み込まれ、頸聯に「一身忠胆倚長劍、幾歲帰心折大刀」(一身忠胆長劍に倚り、幾歲帰

心大刀を折る)と、故郷への帰還を思う「忠」臣の姿が描かれており、確実に蘇武が強く意識されて作られた辺塞詩である。鳩巢の辺塞詩「塞外客意」にも「雁」、「書」、「故国」などの語が用いられ蘇武を想起させる。順庵と鳩巢においては、辺塞詩と漢代の忠臣、蘇武を詠んだ詠史詩とが深く関連する。

「報国」や「報国」といった忠節の表現は、鳩巢の『赤穂義人録』(巻下、甘雨亭叢書第四集所収)にも散見される。大石良雄は嫡男の良金に討ち入りへの参加を促し、「汝独不念以此時捐生而有以報先君於地下。吾勸汝死」(汝独り此の時を以て生を捐て、以て先君に地下に報ゆること有るを念はず。吾汝に死せんことを勸む)と、自らの命を捨て、亡き藩主に「報ゆる」ように諭す。また近松行重の母親は、老母のことを気にかけて行重が義氣を損なってしまうことを心配し、「故先子死、以壺子報国之志。子其勉之。母敢後衆」(故に子に先んじて死して、以て子の国に報ゆるの志を壺にす。子其れ之を勉めよ。敢へて衆に後る、こと母れ)と遺言を書き残して自殺した。ここでは母の遺言の中で忠義が「国に報ゆるの志」と表現されている。行重はこの母の遺言を読み、号泣している。

鳩巢は、近松行重の母親の自殺について、自注に「直清謂此与王陵母事相類」(直清謂へらく此れ王陵が母の事と相ひ類す)と記す。秦末漢初の武將王陵は、楚漢戦争の際、劉邦に忠誠を誓っていた。そこで、敵対する項羽は王陵の母を人質にとり、王陵を従わせようとしたところ、王陵の母は自殺し、王陵が劉邦の忠臣

のままではられるようにした（『漢書』王陵伝）。鳩巢は、王陵の母が結局は子の「立身」を助けたのに対し、行重の母は子に「捐生以報無後之主」（生を捐てて以て後無きの主に報ゆる）こと、すなわち命を捨てて跡継ぎも無い主君に「報ゆる」ことを勧めた点を指摘し、「其過陵母也遠矣」（其の陵母を過ぐるや遠し）と、行重の母は王陵の母に遙かに勝っている、との評価を下す。

注目すべきは、鳩巢が赤穂事件を漢代の史実と照合した点である。鳩巢の門人青地麗沢は、同様のことを詩の中で行った。宝永六年（一七〇九）、『赤穂義人録』改訂の完了を記念し、鳩巢の門人たちは赤穂浪士を称える詩文を作った。それらは大地昌言編『赤穂義人録後語』（宝永六年七月跋、甘雨亭叢書第四集所収）に収められており、その内、左に掲出する青地麗沢の詩（宝永六年作）では、赤穂事件が秦末漢初の史実に託されて詠まれている。

喜義人録成二首（其二）

一撃博浪椎	一撃	博浪の椎
猛風虎嘯悲	猛風	虎嘯して悲しむ
粉身酬国日	粉身	国に酬ゆる日
血涙復仇時	血涙	仇に復ゆる時
忠義華夷見	忠義	華夷見て
精誠草木知	精誠	草木知る
還欣遷史在	還た欣ぶ	遷史在りて
宇宙大名垂	宇宙に大名垂る、を	

（五言律詩、仄起式、上平声四支韻（椎・悲・時・知・垂））

詩本体は赤穂事件に一切言及しないため、「義人録成るを喜ぶ」という詩題が無ければ、祖国（韓）の仇を討つため、博浪沙で秦の始皇帝を襲撃した秦末漢初の軍師、張良の「忠義」を褒め、それが司馬遷の『史記』によって世界中、また万世に知れ渡ったことを詠んだ詠史詩として読めてしまう。しかし詩題によって、博浪沙事件が赤穂事件、司馬遷『史記』が鳩巢『赤穂義人録』を表していることが分かる。このように「時事」を史実に託して詠むのは、「詩史」杜甫に倣った作詩方法と考えてよいであろう。

第五句は、張の「忠義」が『史記』によって「華夷」に知れ渡ったことを言うが、これは『赤穂義人録』にも当てはまることであり、決して現実から乖離していない。『赤穂義人録』が海外の読者を想定して書かれたであろうこと、また実際に同書が朝鮮に遣わされたであろうことについては、川平敏文氏による指摘が備わる。鳩巢自身、『赤穂義人録』が朝鮮の人の手に渡されようとしていることを耳にして、正徳三年（一七一三）八月二十三日の書簡（『兼山秘策』、『日本経済叢書』巻二、二六六頁）で「外国に迄四十七人の事相達申候。是は四十七人へは余程の奉公かと奉存候」と記し、感激を隠せないでいる。

麗沢の詩を字句の上から検討すると、張良に関する李白の詠史詩「経下邳圯橋懷張子房」（『唐詩訓解』巻一）にある「虎嘯」の語が用いられ、第三句の「酬国日」は、鳩巢「塞下曲」第七句で

用いられた「酬国日」と一致する。「報国」の用例は唐宋の詩に多いが、「酬国」の用例は少ない。鳩巢は句の第二字が孤平となるのを避けるべく、仄声の「報」の代わりに平声の「酬」の字を用いたと考えられる。麗沢の詩でも状況は同じであり、偶然にも鳩巢と同じ表現が生まれた可能性は否めない。しかし、自身の師へのオマージュとして、鳩巢の辺塞詩からこの三字を借用した可能性もある。いずれにせよ、麗沢の詩と鳩巢の宝永三年作の辺塞詩二首がよく共鳴し合うことは確かである。

管見の限り、鳩巢が赤穂事件を意識して作詩をした、との証言は、本人からも周囲からも得られない。そもそも、なぜ鳩巢は赤穂事件を直接詠んだ詩を作らなかつたのだろうか。まず赤穂事件を詩に詠むとすれば、詠史詩が想起されるが、杉下元明氏が指摘されたように、木門・徂徠門では詠史詩が多くは作られず、歴史は文で論じられる傾向が強まった。¹³⁾しかし、そもそも鳩巢の世代にとって、赤穂事件とは、「歴史」ではなく「時事」であった。

なお「赤穂義人録」は、赤穂事件に「歴史」として接することとなる後世の読者を想定して書かれている。赤穂事件を題材に詠史詩が作られるようになるのは、管見では西山拙斎以降である。鳩巢は尺牘で赤穂事件に言及し、祭文「甲大石良雄文」（『鳩巢先生文集』後編巻十七）も作った。しかし盛唐詩を作詩の規範とした鳩巢にとって、「時事」を詩に詠み込む方法は、「詩史」と呼ばれた杜甫に倣う他、存在しなかつたのではないか。これを考慮すれば、鳩巢が赤穂事件という時事を辺塞詩に託した可能性は留保さ

れよう。

宝永三年の鳩巢の辺塞詩に当世批判の要素があるとすれば、杜甫「後出塞」第三首と同じく、批判の矛先は主君ではなく、その臣下たちに向いている。鳩巢は稲生若水宛ての尺牘「与稲宣義書」（宝永四年撰、『鳩巢先生文集』前編巻十一）で「嗚呼士風不振久矣」（嗚呼、士風振はざること久し）と、公儀（將軍または藩主）に仕える身である武士の頹廢を嘆き、『赤穂義人録』が彼らの風教に役立つだろうと記した。鳩巢の詩の主意は、忠臣の活躍という現実の肯定であり、体制批判ではない。近世後期から幕末までの菅茶山の政治批判詩や藤森弘庵の時局を詠んだ詩などは、性質が異なる。¹⁴⁾

ところで祇園南海は、杜甫を「詩史」として称賛すること、また本来は史書の領域に属する「史論」、「人物」の「褒貶」、「時事」を詩に持ち込むことを強く批判した。

宋人詩ヲ以テ道学ヲ論ジ、史論人物ヲ論ズ。甚シクシテハ、杜子美ガ詩ニ、一字ノ褒貶ヲ寓ス。コレヲ詩史ト云フベシト賞嘆シ、時事ヲ論ズル処、忠義君ヲ忘レズト称美スル類、以ノ外ナル僻事ト云フベシ。一字ノ褒貶ヲ寓シテ、世ノ警戒トスルコトハ、春秋ノ教ニテ、後世史官ノ守ル所、曾テ詩ヲ借ルコト無ク、詩モ亦性情ヲ吟詠スベキ器ヲ以テ、史法ヲ借ベキ義無シ。（祇園南海『詩学逢原』（宝暦十三年（一七六三）刊）卷上「詩語常語取義」）

南海の見解は、順庵、鳩巢、麗沢と正反対である。順庵と鳩巢の辺塞詩は、南海から見れば「道学」臭のする「忠義君ヲ忘レズト称美スル類」に相当するであろう。白石の立場が奈辺にあったかについてはすぐに論じる用意がないが、少なくとも木門内部で宋代、特に北宋の詩論を介して盛唐詩を理解することをめぐって意見が割れていたことは確かである。詩は純粹に「性情」を詠むものとする南海の立場は、高山大毅氏の指摘されるような、「題詠を通じて様々な立場の感情のあり方を理解し、そして再現する」徂徠門の作詩法に近いと言えよう。¹⁵⁾ 徂徠門の服部南郭に仮託された『唐詩選国字解』（安永九年（一七八〇）刊）も、杜甫

「後出塞」（卷一）について、「是ヲ安祿山ガコトニアテ、云ハアヤマリジヤ」と、杜甫の辺塞詩を時事と関連付けるのは誤りだとして、『唐詩訓解』の説を却下している。後発の南海や徂徠門下は、『詩史』を貴ぶ順庵や鳩巢たちによる盛唐詩受容（あるいは、『唐詩訓解』に見える詩の解釈）を乗り越えんとして、辺塞詩を意識的に歴史・時事から切り離す方向へと向かって行ったのではないだろうか。

おわりに

木門における辺塞詩は、『唐詩訓解』所収の詩を中心とした唐詩、殊に盛唐詩の暗記と、模倣によって作られる題詠詩であった。多く漢代の辺境の地での戦闘の情景を詠むこれらの詩は、一見、太平の世を謳歌していた近世中期日本の現実と没交渉であるかの

ように思われる。しかし、木下順庵と室鳩巢の辺塞詩は、詠史詩特に漢代の忠臣として名高い蘇武を詠んだ詠史詩と関連していた。更に俯瞰すれば、順庵の辺塞詩受容は、和漢の歴代の武将を称揚する詠史詩の延長線上にあり、鳩巢の辺塞詩もその流れを汲むものであったと言える。

同時に、順庵と鳩巢は、「時事」を詩に詠み、鮮明に時代の様子の後世に伝えた「詩史」として杜甫を捉えていた。その視点は北宋の詩論に拠るが、『唐詩訓解』や『杜少陵先生詩分類集註』で、杜甫の辺塞詩「後出塞」が、時事の安祿山の乱を漢代の辺塞に託して詠んだ詩として解釈されることも通ずる。鳩巢の門人青地麗沢には赤穂事件を漢代の史実に託して詠んだ詩があり、鳩巢は『赤穂義人録』で、赤穂事件を秦末漢初の史実と比した。以上を考慮すると、鳩巢の宝永三年（一七〇六）作の辺塞詩二首が、漢代の辺塞で戦う忠臣像に、鳩巢にとつての「時事」である赤穂事件を託して詠んだ詩である可能性が指摘できる。

その後、木門の祇園南海、及び徂徠門によって、盛唐詩を歴史や時事から意識的に切り離そうとする流れが生じた。日野氏の指摘された「現実の遮断」は、当初、木門の一部で、盛唐詩が現実や史実と呼応するものとして受容されたことへの反発であったと考えられる。しかし、木門・徂徠派の一人一人が、盛唐詩と歴史・時事の関係性について、いかなる考えを持ち、詩作を行ったかについては、今後、個別の精査が俟たれるところである。

- (1) 村上哲見「唐詩」(講談社、一九九八年)、一六五頁。
- (2) 土佐朋子「藤原宇合の辺塞詩」『東京医科歯科大学教養部研究紀要』第四十二号(二〇一二年三月)、一一―一頁。
- (3) 日野龍夫「徂徠学派の役割」(同氏「江戸の儒学」日野龍夫著作集第一卷(「べりかん社、二〇〇五年)、三九〇頁。初出一九八六年)。
- (4) 同上「壺中の天―服部南郭の詩境」(同氏「江戸人とユートピア」(岩波書店、二〇〇四年、初版一九七七年)、一七〇―一七一頁)。
- (5) 杉下元明「室新詩評」考(同氏「江戸漢詩―影響と変容の系譜」(「べりかん社、二〇〇四年)、八七頁。初出一九九四年)。
- (6) 紫陽会編著「新井白石「陶情詩集」の研究」(汲古書院、二〇一二年) 参照。
- (7) 有木大輔「嵩山房小林新兵衛による『唐詩訓解』排斥」(同氏「唐詩選版本研究」(好文出版、二〇一三年)、九九―一〇〇頁。初出二〇〇七年)。
- (8) 新井白石「室新詩評」(「新井白石全集」第六卷、六七三頁)。
- (9) 「詩史」については、浅見洋二「中国の詩学認識―中世から近世への転換」(創文社、二〇〇八年)、三八五―四五九頁参照。
- (10) 大地東川「跋文」(宝永六年(一七〇九)七月撰。大地東川編「赤穂義人録後語」(甘雨亭叢書第四集、嘉永元年(一八四八)刊) 所収) 参照。
- (11) 勝又基「藤井懶齋伝―いかにして『本朝孝子伝』は生まれたか」(同氏「親孝行の江戸文化」(笠間書院、二〇一七年)、三八八頁。初出二〇一二年)。なお藤井懶齋「書赤穂義人録後」(宝永四年八月撰、「赤穂義人録」(書写年不詳、棲碧楼叢書十九、島根

大学桑原文庫蔵) 所収) でも懶齋が「赤穂義人録」写本を入手したことについて触れられている。

- (12) 川平敏文「室鳩巢「赤穂義人録」論―その微意と対外意識」(井上泰至編「近世日本の歴史叙述と対外意識」(勉誠出版、二〇一六年)、一三三―一三六頁)。

- (13) 杉下元明「王朝の文人と江戸漢詩」『日本漢文学研究』第十号(二〇一五年三月)、一〇一―一〇二頁。なお木下順庵には詠史詩が多いが、門人たちには少ない。

- (14) 小財陽平「菅茶山の政治批判詩―「忌諱に触れる」作品をめぐって」(同氏「菅茶山とその時代」(新典社、二〇一五年)。初出二〇〇八年、佐藤温「藤森弘庵「春雨楼詩鈔」と幕末の出版検閲」『近世文藝』第百三号(二〇一六年一月)、四一―五七頁参照)。

- (15) 高山大毅「「人情」理解と「断章取義」」(同氏「近世日本の「礼学」と「修辞」―荻生徂徠以後の「接人」の制度構想」(東京大学出版会、二〇一六年)、二二二頁)。

付記

本稿は平成二十九年大阪大学国語国文学会における講演内容に基づくものです。席上で御教示を頂いた諸先生方に深謝申し上げます。

(やまもと・よしとか 本学講師)